たけのこ幼稚園とラジオのおっちゃん(2)

庄籠（しょうごもり）　道子

「おっちゃんが走るで」の巻

たけのこ幼稚園には、朝とか二十分休みに、よくたけのこ小学校の小学生がやってくる。なんせ園庭と校庭はつながっているから、すぐ来られる。一年生になったばかりの子どもたちが、入れかわり立ちかわりのぞきにくる。

「なつかしいわあ」

「ほんま、なつかしいわ」

なんて言っている。ついこの前卒業したばかりなのに。

四年生くらいの男の子が来た。籠（こもり）先生に何か言ってる。りょうた・たつや・としなりの三人組は、こっそりそばに行って聞き耳をたてた。四年生が言ってる。

「なみかってごっついブスやろ」
「あら、かわいいわよ」と、籠先生。
「いや、ブスやで」
「そんなことない。かわいいよ」
「いいや、ブス。めっちゃめちゃのブス。絶対ブス」
なみかちゃんってブスやと思う？　三人組は、顔を見合わせた。ブスやとは思わへんけど、あそこまで言われたなら、ぼくだったら「そういえば、ちょっと……」と言うな。籠先生も言うかな。
「絶対ブスやない！　かわいい!!」
籠先生、むきになって言い張っている。籠先生、がんこもんやなー。
四年生が帰っていった。竹田園長先生が来た。
「あら、あれ、なみかちゃんのおにいちゃんや。何か用があったんかいな？」
籠先生が、ちょっとドキッとしたようなホッとしたような複雑な顔をした。籠先生、がんこもんで良かったなあ。
「先生、バットとボール、貸して」
一年生が来た。野球だ。ぼくたちも寄せてもらお。三人組は、一年生の後について行った。
野球をしていると、
「おっさん」もみの声がした。
「えっ？」籠先生があわてて振り返った。
前の道をラジオのおっちゃんが歩いてくる。ぼくらは、保育所の時からのつきあいやから、ラジオのおっちゃんのこと、よー知っとるけど、四月に来たばっかりの籠先生は、初めておっちゃんを見るらしい。しげしげと見ている。
年のころは六十歳くらい。やせていて頭は丸坊主。日に焼けた黒い顔。毛玉のついた足袋のくつしたにぞうり。つぎのあたった作業ズボンに、下着のシャツ。左耳にラジオを当て、ラジオ体操の曲に合

わせてリズミカルに右手を振りながら歩いてくる。
おっちゃんは、向かいの保育所の門のかんぬきを開けて入っていく。
おっちゃんが保育所から出てきた。門のかんぬきをきちんと閉める。幼稚園に入ってきた。**りょうた**が、
「おっちゃん、おはよう」と言った。
「おっさん」
もみが、おっちゃんに寄っていった。籠先生も寄っていった。
おっちゃんは、**もみ**にも籠先生にも気付かないみたい。ラジオ体操の曲にあわせて右手を振りながら、小学校の校庭に歩いていった。
籠先生は、おっちゃんが持っているラジオをじーっと見ていた。そして、むずかしい顔をして竹田園長先生の所へ歩いていった。
「園長先生、園長先生が、ラジオのおっちゃんは、いつもラジオ体操を聞いていると言うてはったから、私、カセットデッキじゃないのかと思っとったんですけど、あれは、やっぱりラジオですね。……一日中ラジオ体操を流している局なんかないやろうに、なんで『ラジオのおっちゃん』のラジオからは、いっつもラジオ体操が聞こえてるんやろ。なんでやろ？　うーん」籠先生は、うなっている。
たつやが、**としなり**に、こっそり言った。
「籠先生、あほちゃうか。ラジオを持っとおから『ラジオのおっちゃん』やんか。カセット持っとんなら『カセットのおっちゃん』って呼ばれとるわ」
「ほんまや」**りょうた**が言って、三人組は、こっそり笑った。

次の日。
「リレー、したい」
りょうたが言った。竹田園長先生が園庭に白線でトラックを書いた。籠先生がバトンを出してきた。オレンジチームと白チームに分かれた。白チームは

帽子を裏返す。

かずがオレンジチームになった。「ぼくも」「ぼくも」とオレンジチームばかりになった。

「あら、これじゃあ、リレーはでけへんなあ……」

籠先生がいじわるそうに言った。えらいこっちゃ。

「ぼく、白になるわ」としなりが言った。「ぼくも」何人かが白チームになった。白チームがひとり足りない。

「よっしゃ。園長先生が入ったる」

「やった！」

走る順番を決めていると、保育所の建物の向こうから、大きな叫び声がした。ラジオのおっちゃんの声や。ぼくらはよー知っとおけど、四月に来たばっかりの籠先生はぎょっとした顔になった。そして、あわててまわりを見まわしている。

「ラジオのおっちゃんの声やで」たつやが教えてやった。

「ああ、そうなん」と籠先生が安心したように答えた。

ぼくらは当たり前の顔で並んでいる。園長先生も驚きもせず子どもたちの列に並んでる。

しばらくすると、保育所からラジオのおっちゃんが出てきた。「ほんまや」と籠先生。

おっちゃんは、幼稚園に入ってくると、園庭のトランポリンのすみにラジオを置いた。トランポリンには、ももきとじゅんときみなりが跳んで遊んでいた。ラジオを置いたおっちゃんは、「どけ」というふうに手を振って、大きな声を出した。三人はあわてて、トランポリンから降りた。

「おっちゃん、おはよう」

りょうたがあいさつした。

「おっ、おはようー」

おっちゃんがにっこりした。

「おっちゃん、おはよう。あついなー」

園長先生もあいさつしてる。

「あちいなー」

おっちゃんが片手をあげた。

「きょうは、涼しいけど……」籠先生がつぶやいた。おっちゃんは昼でも夜でも「おはよう」と言うし、どんなに寒い日でも「あちいなー」と言うんやで。そんなことも知らんのかいな。**たつや**が教えてやったら、「そうか。寒いなーより暑いなーの方がインパクトがあるもんなー」などと、わけのわからんことをぶつぶつ言った。

「よーい・どん！」リレーが始まった。さすが、みんなが同じチームになりたがっていただけあって、**かず**はめちゃくちゃ速い。

竹田園長先生も負けてない。細い身体で必死に走っている。

「いけーっ」

「追いぬけー」

みんな大声で応援している。さあ、アンカーだ。これで勝敗が決まるのだ。

その時だった。何やら大きな叫び声がした。

見ると、ラジオのおっちゃんがジャングルジムの横に立っている。こっちに向かって「よーい・どん」の構えをして立っている。

「おっちゃんが走るで」

りょうたが言った。

「どかな」

たつやが言った。子どもたちがさっと園庭のすみや、園庭の真ん中に行った。

「としちゃん、おっちゃんが走るで」

りょうたの声にアンカーで走っていた**としなり**も、さっとはしっこによけた。籠先生も、よくわからないままに園庭のすみっこに行った。

ラジオのおっちゃんが走り出した。さっきまで子

どもたちが走っていた園庭のトラックを走る。速い。全速力だ。

おっちゃんのうしろについてりょうたが走り始めた。かずも走り始めた。たつやもとしなりももみもついて走った。おっちゃんは速い。追いつけない。

だけど、おっちゃんは、トラックを二周すると、走るのをやめた。はあはあ言ってる。足元がよたよたしてる。

「あー、あかん、あかん。」

そう言いながら、おっちゃんは、トランポリンの方に歩いていった。

おっちゃんにトランポリンから追い払われてぶらんこに乗っていたももきたちが、すっとトランポリンのそばに戻ってきた。

おっちゃんがラジオを手に取ったとたん、ももきたちが、さっとトランポリンに乗って跳び始めた。

おっちゃんは、ラジオを左手に持って、小学校の校庭に歩いていった。

「きょうは、ラジオから音が聞こえてなかった」

おっちゃんの後ろ姿を見送りながら、籠先生は腕組をして考えこんでいる。

ぼくらはそれどころじゃない。勝負の決着をつけねば。

「今度はぼく、白組になる」

「アンカーやりたい」

と、並び始めている。

「あのー、さっきの勝負は？」籠先生がみんなの顔を見たけど、誰もそんな過去の事にはこだわっていない。

「あかん。あんたはさっきもアンカーやったろ。ほかの子にかわり！」

竹田園長先生がとしなりとアンカーたすきを取り合いしてる。

（保育研究グループ　はるにれ）